

資源管理・海洋環境シリーズ

漁獲統計からみる釧路管内のつぶ類漁獲状況

キーワード：漁獲統計、つぶ類、エゾボラ、オオカラフトバイ、アヤボラ

はじめに

「つぶ」は、北海道内でアワビ類やサザエ類を除いた巻貝類の総称として使われており¹⁾、2024年の漁獲量は6,274トン、漁獲金額は26億円と北海道の重要資源となっています（2024年度北海道水産現勢）。

北海道に存在する「つぶ」は、エゾボラ、エゾボラモドキ、ヒメエゾボラ、エゾバイ、オオカラフトバイ、アヤボラなどの産業重要種を含めて合計で50種類程度¹⁾とされていますが、種判別が難しいため水産現勢では「つぶ類」としてひとくくりに扱われています。水産現勢からわかるのは、「つぶ類」を合計した漁獲量の変化であり、エゾボラやアヤボラといった種別の変化がわからず、つぶ類のうちどの種が減っている、増えているのか把握できていないという課題があります。

太平洋沿岸のほとんどの漁協で、市場で荷受ける際に、つぶ類はその形態や商品価値に応じて「銘柄」といういくつかのグループに分けられて集荷されています。市場における荷受数量（以下、電算データ）を集計すれば、つぶ類の合計ではなく、「銘柄」ごとの漁獲量を調べることができるといことで、本稿では、つぶ類の主要な生産地区の一つである釧路地区のA漁協にご協力いただき、2013～2025年の電算データを用いて、銘柄別の漁獲量変動を調べた結果を紹介します。

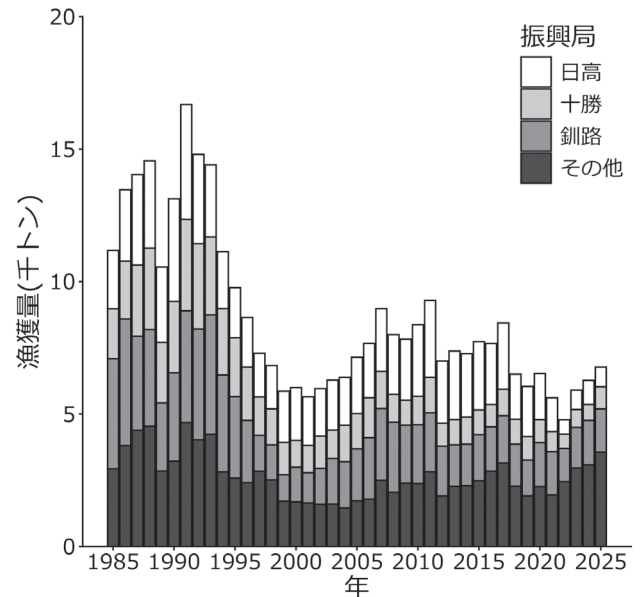


図1 全道の振興局別つぶ類漁獲量（2024年度水産現勢より、2025年のみ水試集計速報値）

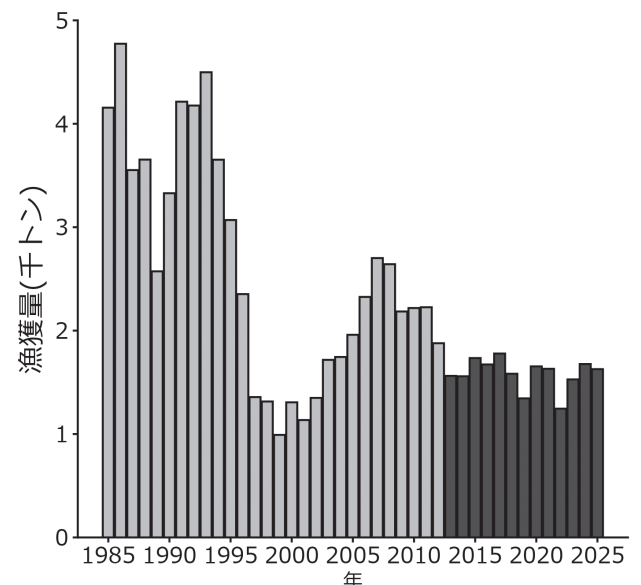


図2 釧路管内のつぶ類の漁獲量（2024年度水産現勢より、2025年のみ水試集計速報値）（電算データとリンクする2013年以降を濃灰色で表す）

つぶ類の漁獲量変動

まずは、水産現勢からつぶ類の全道漁獲量の経年変化を図1に示します。漁獲量が最も多かったのが1991年の16,684トンで、この年の漁獲量を振興局別にみると、日高振興局管内で4,333トン、十勝総合振興局管内で3,454トン、釧路総合振興局管内で4,213トンが漁獲されていました。しかし、1991年をピークに漁獲量が減少し、2000年代後半にやや回復したもののその後再び減少傾向にあり、2022年には過去最低の4,781トンで、ピーク時の約28%となりました。これは、2021年に発生した北海道太平洋海域で発生した大規模有害赤潮が、エゾボラ類に致死的な影響を有していたことが要因のひとつとして考えられています^{2),3)}。

同様に本稿の対象である釧路管内の漁獲量の経年変化を図2に示します。釧路管内では、1995年まで2,500トン以上の漁獲がありましたが、1990年代後半にかけて減少し、1999年に過去最低の991トンとなりました。収集した電算データが存在する2013年以降は、1,500トン前後で推移しており、前年比で最も減少したのは、2022年で前年比76%でした。

釧路地区つぶ類の銘柄別漁獲量

収集した電算データからA漁協のつぶかご漁業で漁獲されたつぶ類には、「真つぶ」、「活真つぶ」、「貝つぶ」、「灯台つぶ」、「毛つぶ」(図3)の5銘柄存在することがわかりました。本稿では、このうちエゾボラ属(*Neptunea*)と考えられる「真つぶ」、「活真つぶ」、「貝つぶ」の3銘柄を「真つぶ類」とまとめて、「真つぶ類」、「灯台つぶ」、「毛つぶ」の3銘柄についてそれぞれの漁獲量を調査しました。

A漁協のつぶ類の銘柄別漁獲量を図4に示します。2013～2025年の全銘柄を合計したつぶ類の漁

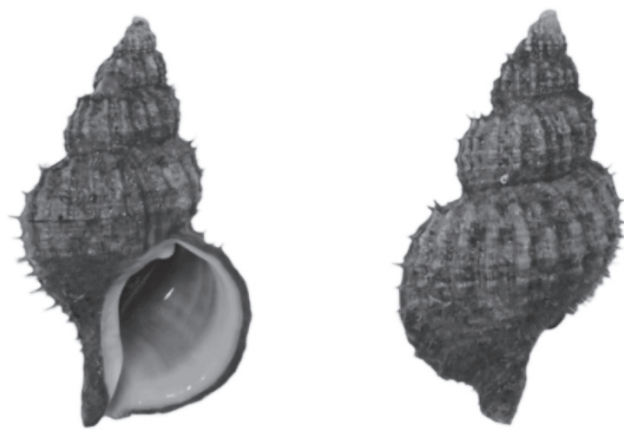


図3 釧路管内で水揚げされた毛つぶ(アヤボラ)

獲量は、280～466トンで推移しており、前年比で減少率が大きかったのは、2019年(前年比27%減)と2022年(前年比29%減)で、2022年は期間中の漁獲が最も少ない年でした。つぶ類の漁獲量に占める割合が高いのは灯台つぶ(31～51%)と毛つぶ(39～50%)で、高い年で2銘柄合わせて9割以上を占めていました。一方、真つぶ類の占める割合は高くても全体の2割程度でした。

続いて、つぶ類の漁獲量を銘柄ごとに折れ線グラフで見えます(図5)。真つぶ類の漁獲量は、他の2銘柄と比べて少ないため、変動が小さいよ

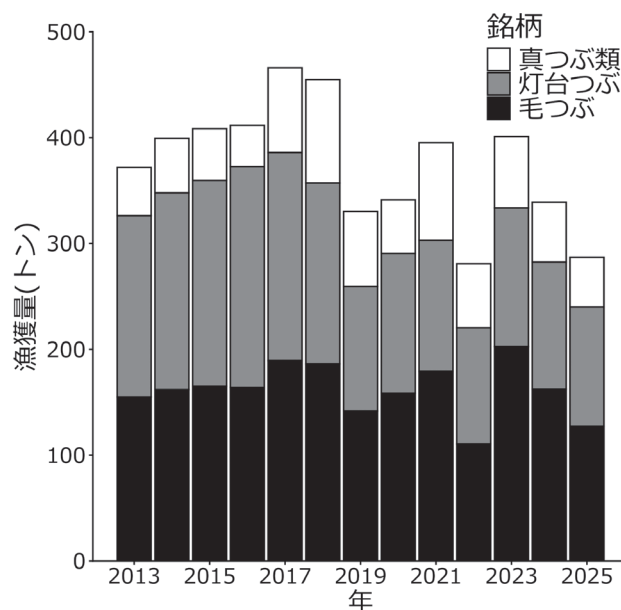


図4 A漁協におけるつぶ類3銘柄の銘柄別の漁獲量

うに見えますが、2017年と2021年にそれぞれ前年比で182、202%に増加しています。一方、2022年の漁獲量は最も減少率が大きく、前年比34%減となっていました。

灯台つぶは、2018年までは150トン以上を漁獲していましたが、2019年に減少し、以降120トン前後で推移しています。2019年は、減少率が最も大きく、前年比31%減となっていました。

毛つぶの漁獲量は、2020年までは140トン以上で安定していましたが、近年の漁獲量の変動が大きく、最も少なかった2022年は110トン（前年比62%）でしたが、翌年には収集した電算データ期間中最も多い202トン（前年比183%）の漁獲がありました。

図4および5より、つぶ類全体の漁獲量の変動は、漁獲量に占める割合が高い毛つぶの漁獲量の変動をよく反映していることがわかりました。

電算データからも、2022年には釧路管内でもつぶ類漁獲量が大幅に減少していることがわかり、2021年に発生した大規模有害赤潮の影響が示唆されました。しかし釧路管内では、2022年に真つぶ

類、灯台つぶ、毛つぶの3銘柄すべてで漁獲量が減少しましたが、減少率が大きかったのは毛つぶであり、2023年には3銘柄すべてで漁獲量が赤潮発生前の水準まで回復しています。

このように釧路管内では、エゾボラ類ではなく、毛つぶの漁獲量の変動が大きいため、毛つぶの漁獲量の変動要因が大規模有害赤潮によるものかどうかは、現時点では明らかではありません。出漁隻数や出漁日などの漁獲努力量が、漁獲量の変動に影響した可能性も考えられることから、電算データを使用して、引き続き検討していきます。

釧路地区つぶ類の月別漁獲量

A漁協における2025年のつぶ類の漁獲量を月ごとにまとめたものを図6に示します。漁獲量が多い月は5月と6月で、5月をピークに徐々に減少し、10月に最も漁獲が少なくなることがわかりました。

銘柄ごとに割合を見てみると、4～7月までは、真つぶ類の割合が17%以下と低く、灯台つぶや毛つぶの割合が38～49%と高くなっていますが、8

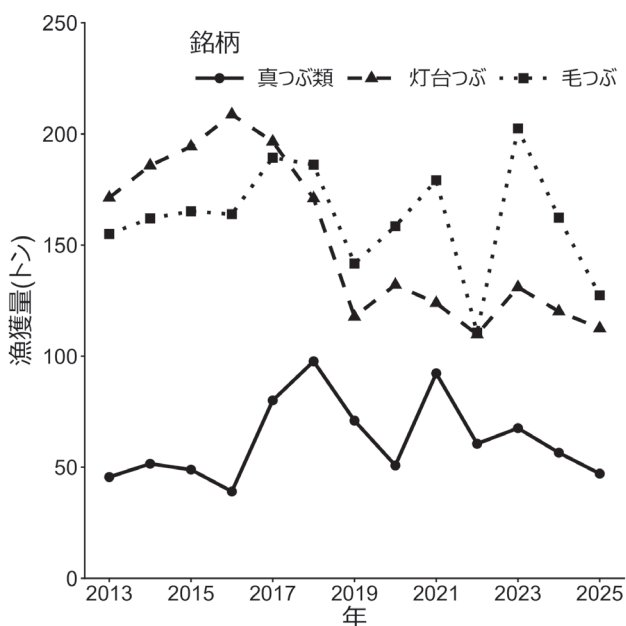


図5 A漁協における真つぶ類、灯台つぶ、毛つぶの銘柄ごとの漁獲量

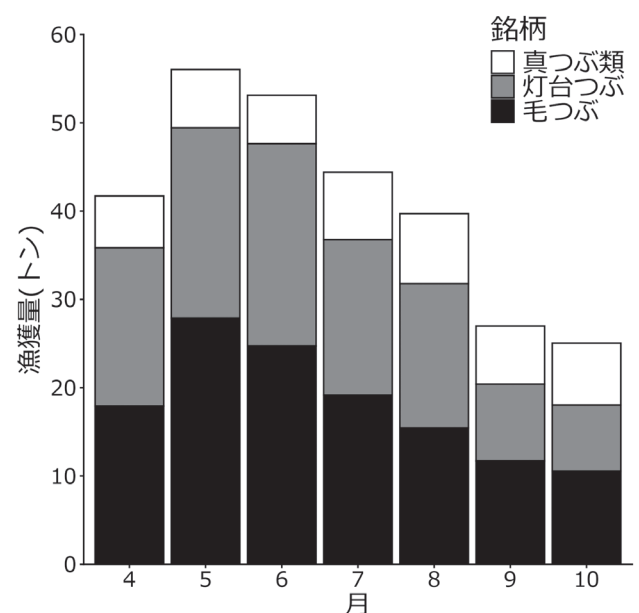


図6 A漁協の2025年つぶ類の銘柄別月別漁獲量

月以降漁獲量の減少に伴って、真つぶ類の割合が増加し、10月に最も高い28%となっていました。

漁獲量の季節変化の要因については、まだ解明できていませんが、電算データ上には、船名や荷受日も記載されていますので、さらなる解析によって、漁獲量の季節変化が、資源の減少によるものなのか、漁獲努力量の減少によるものなのかを明らかにしていきたいと考えています。

おわりに

今回の調査から、1漁協の限られた年数だけではありますが、“つぶ類”だけではわからなかった銘柄ごとの漁獲量の変動が明らかになりました。

本稿で3つの銘柄を真つぶ類として漁獲量を見たように、どの銘柄にどの種が何種含まれているのかは未解明のままであり、銘柄と種の対応関係の解明が残された課題となっています。

現在、釧路水産試験場では、栽培水産試験場とともに、種判別が困難な巻貝類の外部形態的特徴を明らかにすべく、重点研究「道産巻貝類の種分類に関するアーカイブの構築」に取り組んでいます。正確な種判別によって、銘柄と種の対応関係の解明にもつながり、これまで実施困難だった、

種ごとの資源評価が可能になります。

本研究の実施にあたり、多大なるご支援とご協力をいただいたA漁業協同組合の皆様に厚く御礼申し上げます。なお、本報告で使用したデータは、水産庁の水産資源調査・評価推進委託事業により得られたデータを用いました。

参考文献

- 1) 榎原康裕 (2022) 今こそつきとめられる？～残されたツブの謎～, 北水試だより, 105号, 1-4.
- 2) 美坂正・安東祐太郎 (2021) 北海道太平洋沿岸で発生した大規模有害赤潮について, 試験研究は今No.943. <https://www.hro.or.jp/upload/31617/ima943.pdf> (2026年7月27日閲覧)
- 3) 北海道赤潮対策共同研究機関 (2025) 令和5年度北海道赤潮対策緊急支援事業のうち漁場環境改善緊急対策事業, 事業報告書, 3-19.

(深井佑多佳 釧路水試調査研究部

報文番号B2509)